

「加藤時代の建物移設と瓦移動 —古城から新城へ、支城から本城へ—

熊本城調査研究センター 美濃口 紀子

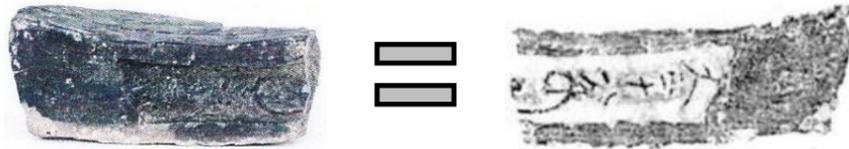
1 はじめに[瓦から何がわかるか]

- ・瓦葺建物の存在（遺物として出土） ⇔ 板葺・桧皮葺（遺物として発見される例は少ない）
- ・年代・時期（紀年銘・刻印） . . . **絶対年代**
- ・製作技法・文様（蓮華文・家紋） . . . **相対年代**
- ・他城郭との関連性（同範・同文）



2 年代の定点となる瓦[紀年銘ほか]

1) 加藤時代[天正・文禄・慶長]



①上三葉紋軒平瓦「天正十八年」(1590)
熊本城高麗門付近出土 ※拓本（左右反転）



②上三葉紋軒平瓦「文禄四年十月一日」(1595) 熊本城飯田丸出土 ※拓本（左右反転）



③「慶長四年八月吉日」銘滴水瓦 (1599) 熊本城出土 ※「小山」銘アリ(左)、ナシ(右)

2) 細川時代[元禄・延享・明和・文政・天保]



④上三葉紋軒平瓦 元禄3年(1690)



⑤細川九曜紋軒平瓦 元禄7年 土山(1694)



⑥細川九曜紋軒平瓦 元禄14年 小山(1701)

熊本城では、江戸時代の年号（刻印：スタンプ）を押した瓦がたくさん見つかっています！



⑦延享4年(1747) 滴水瓦



⑧明和3年(1766) 滴水瓦



⑨文政10年(1827) 滴水瓦



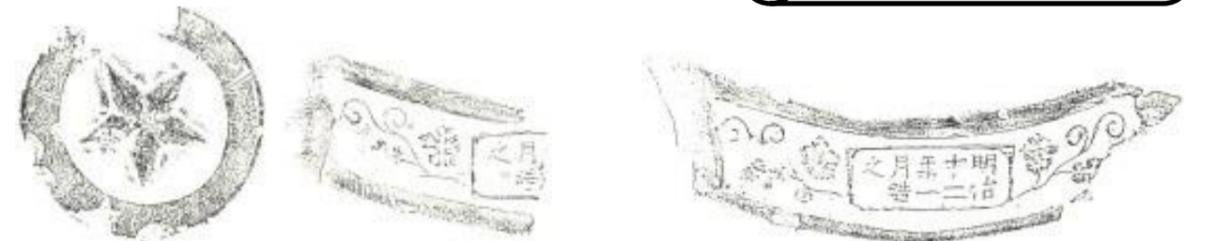
⑩文政13年(1830) 滴水瓦



⑪天保14年(1843) 滴水瓦

文禄・慶長の役以後加藤清正が導入した「滴水瓦」ですが、細川時代に入ってもデザインを継承した瓦を生産しています。年号も様々です。

3) 近代[軍時代]



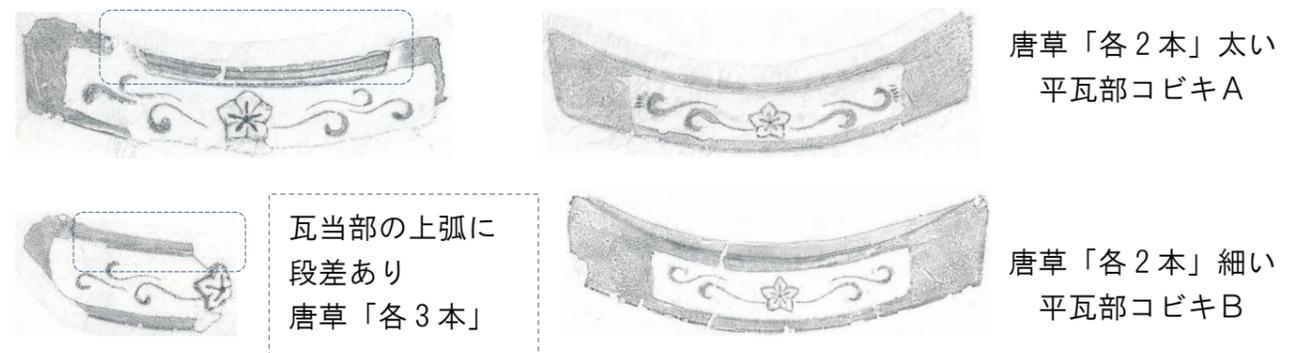
⑫軒棧瓦 明治12年(1879)

※では瓦に紀年銘などが無い場合は . . . ? ⇒刻印・文様・製作技法の変化など



●「小山村五右衛門」銘入り桔梗紋軒平瓦

●「小山村五右衛門」銘入り棟瓦 ※福田家



3 隈本城（古城）・熊本城（新城）・支城

1) 隈本城（古城）



古城の縄張り と 天守

第1表 加藤清正関係文書にみえる普請・作事の記述（天正期）

天正 17 年 (1589)	来春、東国への出兵が無い場合は普請を申し付けるため、先日指示した日限から普請を開始すること。
天正 19 年 (1591)	普請について油断なく、磊（石垣）・堀は念を入れ申しつけること。
天正 19 (1591) カ	石蔵や作事など油断のないように。本丸に御上を建てるため、材木を用意し置いておくこと。 天守への橋が出来たならば、大川（白川）の橋を架けること。
天正 19 年 (1591) カ	石蔵の普請の者共を油断なく監督すること。櫓や蔵の管理、米を納めることなどを指示。
天正 19 年 (1591)	清正帰国以前に作事を完了させるように。 広間の作事は、当春に大工共に指示をした通り木を準備させ、冬中に完成させること。
天正 19 年 (1591)	惣構の塀が破損しているので、留守居の者又は今度知行を与えた者共に指示して建てること。天草瓦に小座敷の瓦を申し付け、残る瓦共には柱などを準備させること。城中の土台や塀の普請も指示すること。
天正 19 年 (1591)	走ノ門口の橋を架ける準備をしておくこと。西ノ門櫓の前の大橋に欄干を作ること。
天正 20 年 (1592)	侍町に惣構の塀、橋を架けさせること。本丸又は加藤喜左衛門・下川又左衛門屋敷前の石垣の塀をあけること。表の門櫓の下の橋を架けること。
天正 20 年 (1592)	本丸御上の作事は度々指示されているが、必ず出来るようにとの御意である。
11 月 25 日	本丸の御上の作事と□□の広間は清正帰国以前に完成させること。
文禄 2 年 (1593)	塀・櫓いずれも作事は油断なく行なうこと。 先日指示した御茶屋・御泊・隈本御座所の建築は肥前名古屋の指示に従うこと。
文禄 3 年 (1594)	下川又左衛門尉屋敷前の方向に馬屋を建てること。小天守の広間が出来たら2階・3階まで留守中に完成させること。本丸北の川の櫓は、北側が下が見えるので壊して建て直すこと。塀・櫓・本丸の屋敷ともに雨漏りのないように念を入れること。又左衛門屋敷の表側に堀を掘り、土居は石垣とすること。
文禄 3 年 (1594) カ	小天守、小広間など念を入れ申しつけること。
文禄 4 年 (1595) カ	城中の作事は前に指示したとおりに建てること。材木の作事も前より念を入れること。 御上の小天守で直す所は大工甚三郎に申し付けた。
文禄 4 年 (1595) カ	高麗から帰国させた大工・大鋸引は、熊本に到着後 10 日休ませて城中の作事に掛り掛らせること。 大工新左衛門に相談し、作料を与えること。

出典

『復興 熊本城 VOL.2 』に掲載予定（年内刊行予定：鶴嶋氏執筆部分）

●古城の天守 —建築場所は？建築年代は？—

天正 17 年（1589）から文禄 4（1595）年までの期間、初期隈本城（古城）の築城に関わる複数の清正書状が残っており、古城にも天守や小天守があったことが確実である。

寛永 7（1630）年前後の絵図によれば、古城の中心部の石垣に囲まれた本丸推定地の東側に「古城」と記入された箇所がある。ここは周囲より 7 m ほど高い場所で、古城の時代には東側直下を白川が流れていたように防衛上も優れた地点で、天守の立地として相応しい場所である。新城の完成以降、白川が付替えられて旧流路は埋め立てられ侍屋敷となり、細川氏入国以降は本丸東側の石垣も撤去されるなど旧地形を失い、現在は天守台を確認できない。

●天守の構造 —地下があった？何階建て？—

清正書状によれば、天守の階数は不明だが地階である石くら（穴蔵）があったとみられる。また小天守は一階が広間となった三階建ての櫓で、古城時代の隈本城も大小天守が並び立つ複合式や連立式の天守であったようだ。

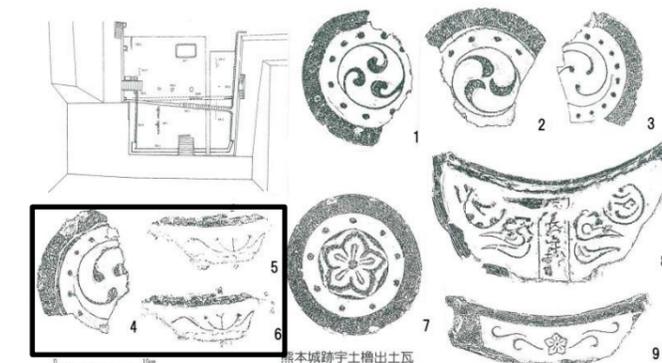
●天守のその後 —古城から新城へ？—

新城完成後の熊本城を描いた絵図では、古城に隅櫓が複数残されているが天守は描かれていない。新城の完成に伴い古城の天守は解体され、移築されたか処分されたと考えられる。新城に移築されたとして、最も可能性が高いのは宇土櫓である。

宇土櫓には慶長期までの望楼型天守に盛んに採用された特徴的なデザイン（廻縁と高欄）が付いている。もちろん熊本城では大・小の天守にしかないデザインである。また建築年代は、その様式から宇土櫓→大天守→小天守の順とされ、大天守建造以前の建築である。さらに宇土櫓の土台となる石垣は、慶長 12 年頃の技術で築造されたもので、想定される新城への移築時期とも矛盾しない。以上を考え合わせると古城の天守の移築先として宇土櫓は最も相応しい櫓となる。



宇土櫓 *廻縁と高欄が付いている=古式のデザイン



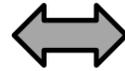
宇土櫓出土瓦 *□は肥前名護屋城等と同範の軒瓦セット

◆宇土櫓 *熊本市『宇土櫓保存修理工事報告書』（1990）

宇土櫓は石垣より建物の方が古い！
古城の天守⇒（新城へ移築）⇒
現在の宇土櫓、なのか・・・？
（あるいは裏五階櫓では？など、
古城天守の移築には諸説あり）
宇土櫓出土瓦の中にも、確かに
古式の軒瓦が混在している・・・。

●「宇土櫓下石垣は、大天守台より新しく小天守台より古い」

- ①大天守台石垣・・・文禄～慶長初期
- ②宇土櫓下石垣・・・慶長中期
- ③小天守台石垣・・・慶長末～元和



●建物の年代

- ①宇土櫓
- ②大天守
- ③小天守

★石垣年代と建物年代が矛盾 = 瓦の研究（瓦の年代が石垣よりも古い）とも整合する

◆熊本城出土瓦（宇土櫓・飯田丸・西出丸ほか）のうち、古式と思われるもの



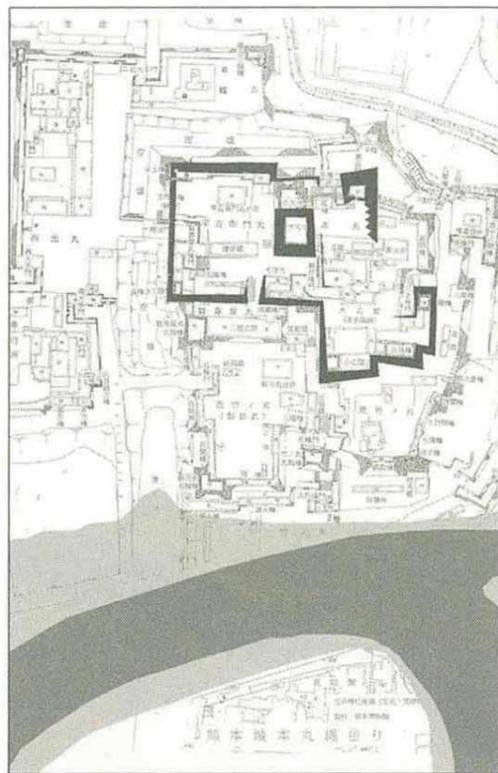
熊本城（新城）の各所から、石垣よりも古式の瓦が出土。古城あるいは支城から運び込んだ？

◆肥前名護屋城出土瓦のうち、熊本城と同文のもの

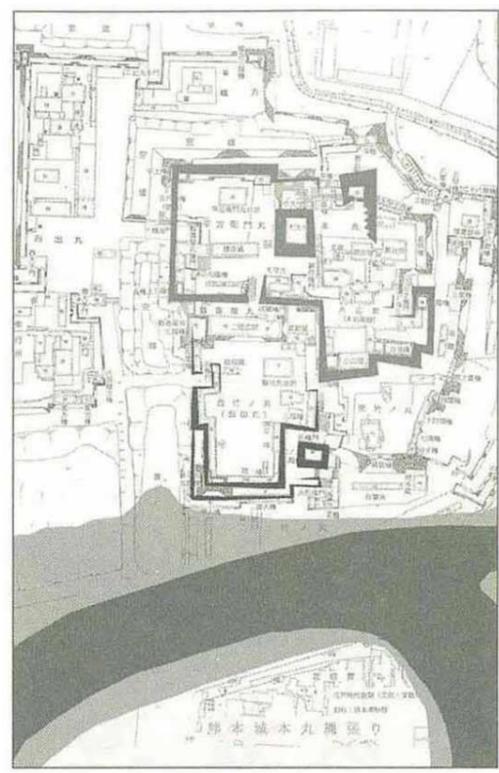


肥前名護屋城から熊本城と同じ瓦が出土するのは、なぜ？
隈本産の瓦 ⇒ 肥前名護屋へ？
（加藤清正） （豊臣秀吉）

2) 熊本城（新城） 出典：石垣の変遷 *富田紘一著 2008『熊本城 歴史と魅力』熊本城顕彰会



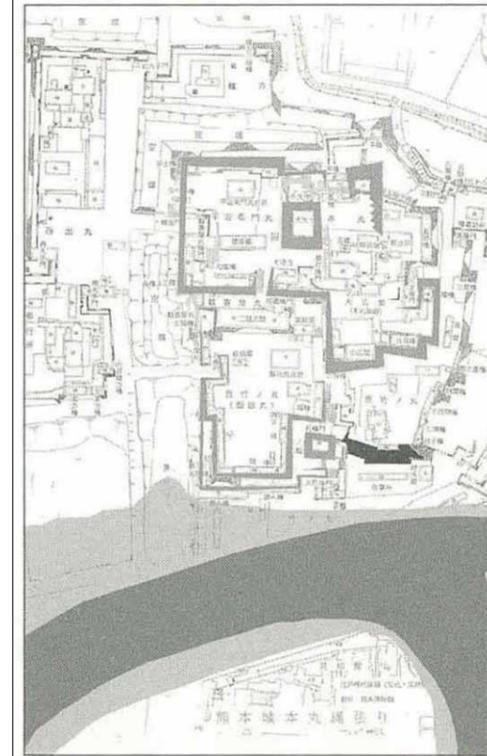
第I期の石垣



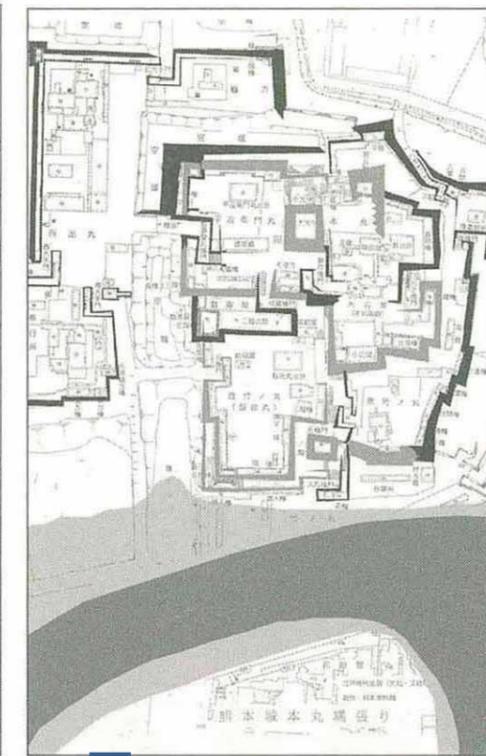
第II期の石垣

I期：石垣の傾斜がはなはだ緩やか。特に出隅の裾部は大きく広がる。大天守石垣・二様（旧）。慶長四年の構築と考えられる。茶臼山の山頂部を取り巻くように築かれ、中央に大天守。

II期：出隅は算木積にならない。石垣勾配は急になる。南西部に追加したもの。飯田丸を囲む石垣。

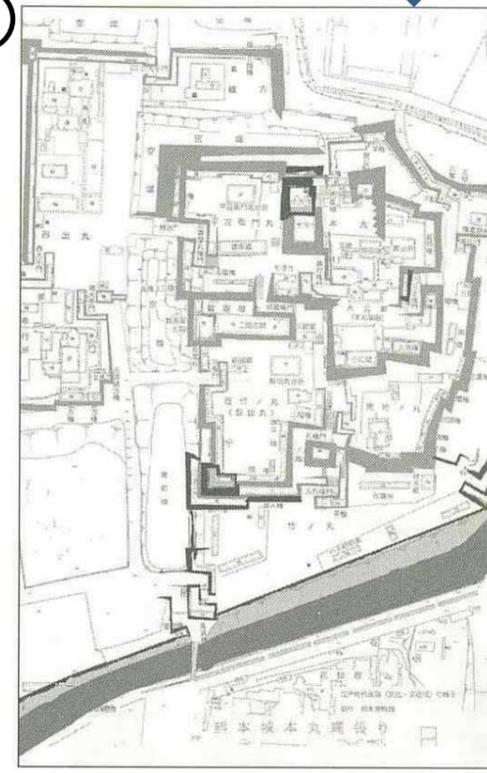


第III期の石垣

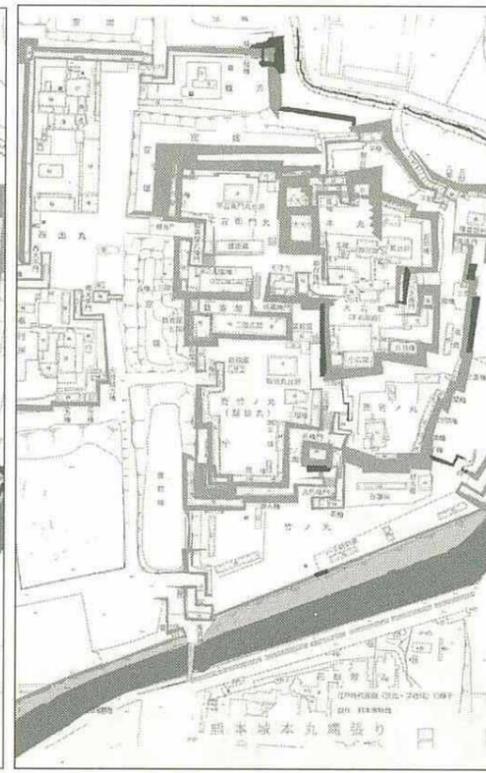


第IV期の石垣

蛇行した白川が直線化された後の工事完了が前提。
旧白川河道に坪井川を流し、川幅が狭くなった分、その右岸に曲輪を構築。



第V期の石垣



第VI期の石垣

III期：東竹ノ丸の南面する石垣上に元硫黄櫓が存在した。その櫓台の石垣の出隅には部分的に横長の石材を交互に積み上げた算木積の技法が混在する。

IV期：本丸の外郭や二ノ丸の主要部など。出隅は完全な算木積となる。

V期：坪井川右岸の竹ノ丸から桜馬場および古城の一部までの熊本城最下段の曲輪の形成。加藤忠広の頃か。小天守台・飯田丸五階櫓台とその下段の石垣。

VI期：細川時代か。櫓方三階櫓台。西竹ノ丸五階櫓や東竹ノ丸東下などに中途半端な高さの石垣。

3) 支城 (端城)

◆麦島城跡



◆宇土城跡



参考) 平山瓦窯跡



◆熊本城跡



熊本城は存続期間が長い
ため、出土瓦も膨大&多種
多様

例 加藤：桔梗紋
細川：九曜紋

一方、支城は「一国一城令」
(1615)で廃棄される等、
比較的存続期間が短い。

例 南関城
佐敷城
水俣城
(加藤領)
麦島城
宇土城
(旧小西領)

支城の瓦と本城(熊本城)
の瓦を比較

同じ瓦も見られる

建物を解体・移築、瓦も新城
へ運び込んだ可能性あり!

*小野将史(熊本大学大学院自然科学研究科)『加藤氏時代の熊本城に関する研究』(2003)

【主な資料】

- 山口県文書館 毛利家文書 「肥後国熊本世間取沙汰聞書」「肥後熊本城略図」
- 「肥後宇土軍記」の「宇土城図」

【小天守の形態特徴】

北側石垣が異常な急勾配である
 平面の南側が大天守の北側に突っ込んだ形
 大・小天守の屋根の取り合いが複雑な形式
 屋根を大きくし片寄せて望楼を載せる
 軒の出が極めて少ない
 内部意匠に御殿の要素が強い

宇土城の天守
 ⇒ (解体・移築)
 ⇒ 現在の熊本城小天守
 . . . なのかも?



大小天守 *屋根の取り合いが複雑、小天守は北側石垣が異常な急勾配、軒の出が少ない

4 まとめ

熊本城内建造物の増築・移築の可能性については、瓦以外の研究成果(建築等)もご紹介します

◆小天守は、増築だった!

大小天守の建築には時期差がある!
大天守建築後 ⇒ 小天守の増築



天守軸組模型(縮尺1/10) *藤岡通夫

大小天守台断面模式図 *藤岡通夫

◆小天守は、宇土城天守を移築した建物!?

◆昭和34年、再建工事中に大小天守礎石列を発見!

参考文献 [もっと詳しく調べてみたい方へ...]

- ✓ 藤岡通夫 1976『熊本城』中央公論美術出版
- ✓ 藤岡通夫 1988『城と城下町』中央公論美術出版
- ✓ 富田紘一 2008『熊本城 歴史と魅力』熊本城顕彰会
- ✓ 熊本市 1990『重要文化財 宇土櫓保存修理工事報告書』
- ✓ 熊本市熊本城調査研究センター 2014『熊本城跡発掘調査報告書1-飯田丸の調査-』
- ✓ 熊本市熊本城調査研究センター 2016『熊本城跡発掘調査報告書2-本丸御殿の調査-第1分冊・第2分冊・第3分冊』
- ✓ 小野将史 2003『加藤氏時代の熊本城に関する研究』(熊本大学大学院自然科学研究科)
- ✓ 美濃口紀子 1998「熊本城出土の李朝系軒丸瓦-いわゆる「日足紋瓦」をめぐる問題-」『織豊城郭』第5号 織豊期城郭研究会
- ✓ 美濃口紀子・白木原和美 2004「織豊城郭における李朝瓦の移入と展開」『佐敷城跡』芦北町教育委員会

【おわりに】

今後も建築学・文献史学・考古学など様々な立場から熊本城を調査・研究することで、新たな発見や定説の修正などがあるかも知れません!